日本ナイル・エチオピア学会第13回学術大会　公開シンポジウム

「まなぶ・かかわる・つくりだす：フィールドワークの現場からみえてくる世界」

パネルディスカッション

フィールドワークの現場から

司　　会：重田眞義（しげたまさよし）

パネリスト：庵原宏義・西﨑伸子・野田浩正・作道信介・設楽知弘

重田　では第二部のパネルディスカッションに入りたいと思います。パネリストの方４人にお話していただいたのですが，最初に基調講演をいただいた庵原さんにもパネリストとして加わっていただきます。

最初に，会場のみなさんから寄せられた質問にお答えいただいて話を始めたいと思います。あまりにたくさんあって，まだ整理収拾がついていないのですが，まずご発表の順番に簡単に答えていただきたいと思います。

庵原さんに寄せられた質問はたくさんあるのですが，タイトルにあった「現場主義」とはどういうことなのか，それを相手に伝える方法はなにか，といった質問が多いので，「現場主義」とは何かについてお話いただけますでしょうか。

庵原　JICA が昨年の 10 月 1 日から独立行政法人になり，緒方貞子さんを理事長にお迎えしました。新しい JICA の方向性として「現場主義」を打ち出しております。現場主義とは，事業に関するいろいろなことの決定権がいままで東京にあったのですが，それをなるべく現地の本当にニーズが分かる在外事務所に移そうということです。移すにはそれだけ人もいるし，現場のこともよく知らないといけない。つまり JICA の本部の人たちを数年で大幅に減らしてそれを在外にもっていき，東京と在外の職員の比率を１：１にする。さらに JICA に入ってきた新人は最初の５カ月から６カ月は東京で研修させ，そのあとすぐ現地に送り込んで８カ月ぐらいは現地でいろいろな体験をしてもらおう，という方向性を打ち出しました。これまで援助はする側の論理がかなり強かったのですが，現地のニーズを的確に把握するために，「まなぶ・かかわる・つくりだす」というフィールドワークを重視するかたちの援助実施にもっていこう，そういう方向性を指して JICA は現場主義といっているわけです。

重田　なるほど。とても乱暴にいってしまうと，東京で決めないで現場で決める，というふうに現場主義が理解できると思います。次にご発表いただいた西﨑さんにはいちばん質問の数が多いのですが，質問の最大公約数は西﨑さんのご研究，つまり「まなぶ」ことが実際の開発援助の場面，あるいは「かかわる・つくりだす」ということに具体的にどのように生かせるのか，という点のようです。難しいでしょうけどその点に関してお答えいただけますか。

西﨑　協力隊のときの経験がいきなり「かかわる」というところから入ったことの反省から，いま「まなぶ」というところにどっぷりとつかっていますが，将来的には「かかわる・つくりだす」ということに進んでいけたらいいな，と思っています。それをどうやってやるかということですが，発表のなかで説明しましたように，これまで自然保護や野生動物保護は保護思想を住民に教育するとか普及するということがおもにおこなわれていました。しかしいまではそういう考え方は古いということで，住民のニーズを考えようということになっているのですが，そのもう一方に大きな流れがあって，人びとは貧しいからだめなんだ，経済的利益を与えれば木も切らないで買うようになるし，ウシもたくさん飼わなくてよくなる，という考え方も根強く残っています。

その経済的利益とは，アフリカではおもに観光産業をつよくしてそこで野生動物を観光すること

で，お金をもうけてその利益を地域住民に分配しようというプロジェクトが多くおこなわれています。しかしエチオピアでは，その観光業も他国に比べたらあまり盛んではなくて，それを直接，野生動物保護プロジェクトにつなげるのはまだ難しい状況です。

いま私が研究しているなかから見出せるのは，住民のニーズを考慮した自然保護プロジェクトのヒントが，いま住民がおこなっている営みのなかにあるのではないかということです。これも発表のなかでいいましたが，住民もただ木を切っているだけではなく，ちゃんと建材を植えていますし，農作物の残滓を利用しています。その足りない部分をどのように支援してあげればいいのか，そういうところから考えていきたいと思っています。

重田　ありがとうございます。では西崎さんが調べられたことが，たとえば卑近な言い方ですがJICA のプロジェクトに役にたつということが言えそうなのでしょうか。質問のほとんどが「調べた，分かった，はよいけれどそれで一体どうなるのですか」というものが多かったのですね。聞いてもなかなか難しいでしょうが，役にたちそうですか。

西崎　それもやはり試行錯誤のなかで一歩踏み出してやってみたいな，と。

重田　そうですね。そこですぐ「役にたつ」といってしまうのもなにか恐ろしい気がします。設楽さんには質問そのものを読ませていただきます。「都市計画をしていく上で，地域住民との対話や共働が大切だと思うのですが，実際に住民の意見は設楽さんの計画では反映されているのでしょうか，あるいはどのように反映されるのでしょうか」という質問ですが，いかがでしょうか。

設楽　近年，日本においても住民参加による町づくり，住民なしにその町の未来像をつくるのはいかがなものか，ということが大きな問題として挙げられているのですが，エチオピアでもそのことは同じことと考えております。

例えばゴンダール市では市役所が毎月新聞のようなものを，市民との接点の場として発行しています。そこで市民へのアンケートをおこない，その数は300～400部だったと把握していますが，ゴンダール市は将来どのように変わっていくべきか，市のポテンシャルはなにか，市の問題点はなにか，といった質問をこれまで数回おこなってきております。

またゴンダール市役所では，50人の市の相談役(日本でいう市議会議員)のような人たちが毎月一回市役所で会議を開いて，各町内のケベレの代表者との議論をおこなうことも実施しています。それが新しい都市計画にどう反映されていくかは，現在まだ都市計画が進んでいる最中なので，具体的にはお話できないのですが，ゴンダール市のポテンシャルである緑豊かなまちを持続していく，失われた緑をどう回復させるか，そういった緑と歴史の町づくりということをとても重要なことと考えております。

重田　ありがとうございます。お話のなかにでてきたケベレというのはエチオピアの行政機関の末端の役割もそなえた町内会のような組織です。そこを通して意見を汲み上げようとしている途中だということですね。さて，野田さんにはとても具体的な質問があって，野田さんのようなお仕事をするにはまずどうすればいいんですか，というのが３枚ありました。そのほかに１枚だけ異質な質問があったので，これも質問してみたいのですが，フィールドワークにおける人とのかかわりのなかでもっとも大切なことはなんでしょうか，という本質的な質問がきていますが，いかがでしょう。

野田　だらだらとしゃべってしまって，論点がどこにあったのか，と反省していたのですが，ありがたい質問を感謝します。わたしのような仕事をするにはどうしたらいいのかというのはひじょうに難しいのですが，やはり最初はシンパシー，共感・同情ではないかと思います。あの人たちは大変なんだなぁ，ということと，いま自分がもっている何かをうまく組み合わせていく，接点をもっていくなかで，わたしはありがたいことにあの仕事をさせてもらいました。

実際にはエチオピアの貧困・飢餓に取り組むときに，家畜診療をとおしてうまくいったのはエチオピア国内でもひじょうに珍しいケースだと思います。エチオピアのなかで家畜の診療をNGOの活動としてやったのは，わたしが初めてなのです。ただわたしがやっているといううわさを聞いて１年後にアメリカ人が同じような活動を始めました。彼も小さな地域でその地域の人たちと密着して，やはり自分の部下を診療の技術者に養成して最終的にはゆだねて帰ってくる，といういきさつにな

ったようです。獣医師にかぎらず人間の医師もそうですし，食糧増産するためには必要な農業技術者といった，いろいろな現地に必要な人材があるわけです。それと現地でのニーズが本当にかち合ったときに初めてこういう仕事ができるわけですから，どうやったらこうなりますか，というよりもある意味で運がよかったし，ある意味で神さまがうまく組み合わせてくださったのかな，とわたしは思っています。

二つ目の質問に関しては，やはり現地の人たちがかけがえのない人たちだということを，まず考えなければいけないと思いました。自分自身が行ったときには「なにかしてあげよう」という気持ちでいたから，彼らが，どういう立場の人たちなんだ，どういうものをもっているんだ，どういういいものがあった上でいまこういう状態になっているんだ，ということを知らないで，たまたま今の状況が貧困だから自分がもっているものをあげましょう，と考えていたと思うんです。でも実際に彼らと現地の言葉を使ってコミュニケーションを図っていくと，彼らがなにを考えているのか，彼らがいまの状況にいたるまでにどういう歴史や環境があったのか，を知ることで初めて，この人たちにどういう可能性があるんだ，自分はたまたま派手なことをやっているけど，あくまでも主体はこの人たちで，自分はお手伝いをさせてもらっているだけだ，というふうに気づかせてもらいました。やはり自分のほうが積極的に突っ込んでいって溶け込んでいって，そこででてくる反発もあり，なおかつ信頼の反応をもらったりして気づかせてもらったんじゃないかなと思います。

重田　野田さんは最初のあいさつもアムハラ語でされましたが，わたしが聞いたところではエチオピア人と同じか，それ以上にアムハラ語がうまい，と。それゆえに俗っぽい言い方ですが，本当に人間同士の付き合いをされた，ということが説明の節々からうかがわれます。一方でトゥルカナの人たちにやられっぱなしだった作道さんには，もっともな質問がたくさん寄せられています。「あなた自身はねだらなかったのですか」，あるいは「トゥルカナの人同士はねだり合わないのですか」というのですが，どうなんでしょうか。

作道　二つ目からいいますと，トゥルカナの人同士もねだりあっています。基本的には主張して自分の要求を言うのはたいへんいいことなのです。われわれは黙っていると，「何が欲しいんだ」と言われたりする，つまり黙っていること自体がある意味をもつということになるのですが，トゥルカナではそういうことは絶対に起こらないので，黙っているとそのままいることになるのです。だから，たとえばトゥルカナの人たちも家畜を失った場合友だちのところにねだりに行ったり，それから日用品もねだりに行きます。一つ目の質問については，わたしは家畜をねだりに行きます。そうするとふだんは「作道はおれの友だちだから，家畜が最後の１頭になってもその１頭をやるぞ」と言ってくれるのですが，実際にねだりにいくと「すまん，いま遠くに行っていないんだ。次の雨季になればな」ということになります。家畜をねだってもらうというのは至難の業なのですが，家畜ぐらいですかね，ねだるのは。

重田　それで結局，家畜は何頭手に入れたのですか。ゼロですか。

作道　いや，そんなことはなくてかなり身近な人からもらったりします。牧畜民にとって家畜は非常に大切なもので，自分の私利私欲でねだるのもなんだな，と思って最近はやりませんが，それでもかつては１回の調査で３～４頭ぐらいもらいました。

重田　そうすると，相当のウシ持ちですね。

作道　同じ地域で家畜の調査をしている人の迷惑にならないようにしています。干ばつでこのあたりにはウシはおりませんので，ヤギかヒツジかということになります。

重田　一枚面白い質問カードがきています。作道さんの発表では，文化は相対的なものだから優れている，劣っているという言い方ができない。それはわかっているのですがトゥルカナの人たちのねだりの苦しみに直面したときの，作道さんの学者として人間としての葛藤が語られたわけです。そこで庵原さんにお聞きしたいのですが，援助の場面ではどうなのでしょう。援助依存症とか援助乞食とかいわれますが，わたしたちがふつうにはいけないと思っていることがやられているのは，たぶんトゥルカナだけではないと思うのです。こういう作道さんのケーススタディを聞かれて，庵原さんはどのような感想をお持ちになりましたか，という質問がきていますが。

庵原　わたしの知っている開発途上国の社会というのは，むかしの日本にもあったと思うのです

が，もしその一族郎党で成功した人がいれば，その家族・親戚たちがいろいろと頼りにして相談ごと・頼みごとにいきます。するとその人がなにかと面倒を見てあげたり，いろいろ調整をしてくれる場合が多い。そういうのをうまくマネージできる人が一族郎党のトップとしてあがめられる。こんな社会が開発途上国にはけっこう残っている。でも実はそれは心温まる助け合いの場だろうとわたしは考えるわけです。昔の日本でも親戚の人にそういう風にしてもらったという記憶が，われわれの世代にはあると思います。そういう意味でそれは自然だろうと思うわけです。ただ援助の世界という観点でいえば，たとえばわれわれが調査にいったときに住民からしつこくねだられるということはほとんどありません。そういうことがあればカウンターパートの人がうまく仕切ってくれる。ただ政府対政府の交渉の場では，援助の額とかやり方の問題で相当なハードネゴシエーションをします。ときどき言いまくられてわたしどものほうがたじたじとしてしまう場合もあります。彼ら独特の理屈で「われわれは途上国の立場からこういう要求をしているのにあなたは受け入れない，あなたが悪い」と言われて「もしかしたらそうかなあ」という心境に追い込まれることもあります。しかし双方とも議論を冷静にしていれば，だいたい収まるところに収まるというのが，これまでのわたしの経験です。

制度上，援助する側の仕組みに当てはめざるを得ず，「これでなくては実施が困難になる」といって先方に理解を求めることもあります。そういうことについてわたしはいろいろ考えさせられることもありますが，いずれにしても交渉ごとは双方向で納得ずくでするということが大切なんだろうと思います。作道先生の言っておられたねだりも，ひとつの交渉ごとのような印象をうけて聞かせていただきました。

重田　それはとても面白いですね。トゥルカナと作道さんの交渉とJICAと某アフリカ国との援助の交渉が，同じ文脈でおこなわれている可能性がある，ということですね。作道さんは珍しい事例としてご報告いただいたと思いますが，もしかしたらそれは援助の場面でも同じようなことが起きているのかもしれません。

ひろく一般にいわれていることは，援助は押し付けであるとか暴力的であるとか，そういった言い方があります。それをもう少し丁寧にいうと，相手のことがよく分かっていないからそういう押し付けをしてしまうんだという反省にも結びつくわけですね。だから外部から批判するというよりは内部の人たちもそういう意識をもっている。今日４人お話いただいたなかで，まだ途中の段階でどうするか分からないという面もあると思うのですが，すくなくとも最初に「まなぶ」というプロセスが大切だという意識は共通していたと思うのです。次の「かかわる」ということについてはどうしたらよいのかわからない，と聞こえるような声もありました。今日のパネルディスカッションはなにか答えを求めるとか，宣言を読み上げるとかいう種類のものではないと思います。「まなぶ・かかわる・つくりだす」というものはホップ･ステップ･ジャンプという段階論ではないのですが，フィールドワークをしようと思うときに誰しもが経験していくプロセスではないかという思いで，企画側としては提案させていただいたわけです。そのため実際にまなんだり，つくりだした経験をお持ちの方からエピソードを語っていただくというかたちで話題提供していただきました。

もう残り時間もわずかなのですが，最後にひとことずつみなさんからお話していただこうと思います。「つくりだす」ということまではなかなかいかないかもしれませんが，「かかわる」という気持ちでご自身がやってこられたことの可能性について話していただいて締めくくろうと思うのですが。可能性はどこに見出せるのか，フィールドワークがどういうことに生かせるか，ということについてご自由にお答えいただきたいと思います。西﨑さんからおねがいします。

西﨑　可能性ということについてはさきほど答えたと思うのですが，いま重田先生がいわれたように，「まなぶ・かかわる・つくりだす」ということは単に一直線の経験ではないと思います。「かかわって」そこで疑問に思ったことをまた「まなび」なおす，それをまた次の「かかわる・つくりだす」ということに向ける。そこでまたつまずいたときには「まなび」なおす。そういう柔軟なシステムが日本にはまだあまりないと思うのですが，そういう往き来がもう少し柔軟になることが，いま協力隊や専門家で行っている人たちにも大事になってくるのではないかと思います。

設楽　いま，わたしがゴンダールで関わってい

る都市計画マスタープラン改訂プロジェクトに関しては，発表でもお話したように優秀な人材の流出を防ぐのがとても難しかったり，専門家を探すのが難しかったりと困難の連続です。しかし，これは他の分野に関して全般的にいえるかどうかは分からないのですが，例えば大学院や社会で数年間学んだだけのわたしが，まだ若くて知識も経験も十分に持ち合わせているとは言えませんが，実際にゴンダールの市役所で働いて，専門学校や大学を卒業したばかりの若いエチオピア人たちと協力しあうことで，様々なことをこの１年間やってきました。そのなかで彼らのスキルがアップし，自分もいろいろな経験を得ることができたのです。

本日はたくさんのお話を伺えて，とても勉強になりました。私の意見としましては，やはりこのようなともに学び，考え，実行するということのなかにこそ，いろいろな可能性があるのではないかと改めて感じています。

野田　「まなぶ・かかわる・つくりだす」ということがひとつのぐるぐる回るものになるのではないかと思います。まなぶことだけに終わらず，それに気づいたらつぎのアクションが「かかわる」であって，そのなかで向こうの人とのあいだで新たなものが創造されていく，それが「つくりだす」。そして「つくり」だしたものが以前あったものとちがって新しいものだから，いいものかわるいものか便利なものか，そこでまた「まなび」なおす，そういうぐるぐる回っていくものだと思うのです。

もうひとつはわたしたちが現場に行ったときに，最初に自分がもっているバックグラウンドでものを考えてしまいがちですが，向こうの人と会話するときには向こうの言葉を覚えていかなければいけないわけです。そこで赤ん坊のときに親から何度もいわれて言葉が使えるようになっていった，あのプロセスを思い出すわけです。あるいはハイハイからちゃんと二本足になって歩くことができるようになったプロセス。そういう長い時間のプロセスのなかで自分もいっしょに育ててもらっている，ということにフィールドワーカーのわたしたちが気づかないと，いつまでたっても向こうの人たちを傍観しているだけではないかと思います。だからわたしはどこの場においても向こうの人たちが育つのと同時に，自分が「まなび，かかわり，つくり」だしながら，自分自身がいっしょに育てられていっているんだという気持ちを大切にしていきたいな，と思っています。

作道　わたしの場合，援助などにかかわりがあまりなく，異文化の研究ということでフィールドに入っているのでだいぶ立場がちがうと思いますが，トゥルカナのフィールドで感じたことを話してみます。トゥルカナのフィールドでは学んだり育てられたりというような余裕のあることはありません。一種の真剣勝負ですよね，生活の。つまりねだりによって交渉ごとがひんぱんに起こる。そのなかでおたがいの関係ができていく。われわれは関係というのはかならずできて深まっていくというメタファーを考えるんですが，わたしはそんなことはないと思います。けっきょくごつごつして断絶があってちっとも関係が深まらない。わたしもねだりをどうしようかと思っていろいろ考えてきたんですが，これが正しいとは思わない。ひじょうに近代的な立場からみた突出した異形の捉え方だと思います。彼らはこんなふうには思っていないと思います。それは分かっているのですが，そういうことを考えない限りうまく調査はできない。それはわたしにとって一種のおまじないですね。これがトゥルカナでねだりの発生する場をうまく捉えているとは思えない。その距離はすごく隔たっている。何度現地に行ったってだめだとわたしは思っています。

もちろん希望はあります。しかしそれはわかるということではありません。トゥルカナの人は関係をつくるのではなくて，そこに行けばすでにわたしは関係のなかにいるわけです。わたしは文化の赤ん坊ではないのです。彼らはわたしをまったくの成人として扱って，同じようにねだってくる。そこには容赦のひとかけらもない。これがたぶん異文化に直面したときにあることなのではないか，とわたしは思っています。もちろん育てるということもあるのですが，そういうやさしい文化ばかりではない。トゥルカナがそれほど過酷だと言いたいわけではないんですよ。たいていは豊かさとか制度というオブラートのなかで隠されているのですが，カルチャーというのは剥き出しのものをもっている。もちろん自然とのあいだのブリッジという考え方もあるのですが，そういう剥き出しのものもある，とわたしは思います。そんなところです。

重田　なんだかこれから火がついて議論が面白くなりそうなお話がでてきたのですが。まなぼう

としてもそんなものは分かるものではない，まあ悲観論ではないでしょうけど。「かかわる」とおこがましくいうけれど，いったとたんに「かかわらされている」という状況がトゥルカナにはあるわけですね。作道さんだけにもうひとつ質問があります。そういう状況のなかでなにが生まれるんでしょう，つくりだされるとしたら。

作道　つくりださないといけないのでしょうか。なにがつくりだされるんですかね，われわれの側に。難しいのですが乏しい経験からいうと，フィールドワークの基本は日本で自分がまわりの人にやっていることと違うことはしてはいけない，ということだと思うのです。要するにわたしが自分の家族や知り合いや敵にやっているのとちがうアプローチをしたら絶対いけない。それは文化が違うから人間のルールが違うということはもちろんあるのですが，でも人との接し方という点では，人間が場所を占めてそこにいる，そこで起きることはそんなに違いはない。困難なことでは違いがない。そういった認識が自分のなかに生まれている，つまり日本の生活の理解は深まったと思いますね。重田さんがどういう意図でおっしゃられているかわかりませんが。

重田　いやまさにそういうことなのです。徹底的に違う，というところにさらされてつらく感じたという経験が，最終的には自分の理解を深めることにつながったという，ちょっと丸めすぎかもしれませんが，そういうことだったと思います。

このシンポジウムを企画したのは，新しく入学された方や若い学生さんたちにフィールドワークというのは面白そうだな，と思ってもらうきっかけにしてもらえたらという願いがあったのです。だからあまりつらいばかりでいやだなとか，マラリアにかかりそうだとか，そういう話もありましたが（笑），そういう印象をもってもらったら大失敗なわけです。

最後にこれはある方のご質問なのですが，これは答えるのではなくてみんなが考えるべき質問だと思いますが，「あなたの人生，あるいはわたしたちにとってフィールドワークをおこなうことを通して学んだことは何だったのですか，それはわたしたちの営みにどのように役立ったのか考えてください」，というものがありました。たいへんありがたいご指摘です。やはりこういうことを考えていくのにふさわしい材料として，エチオピアやアフリカでのフィールドワークが，そういう意味でまさに役に立っていると思った次第です。

パネリストのみなさん，とても長い時間にわたってありがとうございました。今日のところはお開きにさせていただきたいと思います。たくさん質問をいただいて，全部お答えいただけなくて申しわけないのですが，これはパネリストの方にお渡ししてなんらかの形で考えていただく，あるいはどこかで答えていただくそういう材料にさせていただきたいと思いますので，お許しください。ありがとうございました。